



▲「玉應寺」墓と「砂本墓」



▲太鼓楼



▲親鸞聖人絵像



▲玉應寺(三宅中5丁目)

東本願寺が本山の真宗大谷派
寛文12年から近代の砂本先照へ

古い町並みが続く三宅中5丁目に、真宗大谷派の玉應寺が建っています。山号を光耀山と称します。室町時代の明応元年(一四九二)、正信が開基したと伝えています。この時期、浄土真宗中興の祖といわれる本願寺八世蓮如が、河内地方などを布教し、真宗に転派した寺が数多く見られたことから、「南無阿弥陀仏」の教えが広まったものと思われまます。

三宅には玉應寺の創立前後、江戸時代に掛けて、同じ真宗大谷派の願久寺や善長寺、光輪寺(廃寺)、融通念佛宗の西方寺や豊興寺(廃寺)、真言宗の梅松院(廃寺)、臨済宗の自得庵(廃寺)や西之坊(廃寺)など、多くの寺庵が見られました。

玉應寺本堂に昇ると、中央に本尊の阿弥陀如来像が祀られています。その右側には浄土真宗開祖の親鸞の絵像が厨子中に見られます。裏書を調べてみると、寛文十二年(一六七二)夏、本山の大谷本願寺(東本願寺)十五世常如によって下付されたことがわかります。「親鸞聖人御影」「河内丹北郡三宅村 玉應寺常什物也」とあり、当時の住職である正圓に下されたものでした。「願主釋正圓」とあります。

「親鸞聖人御影」の横には、聖徳太子絵像とインド・中国・日本の七高祖絵

像も祀られています。裏書には下付された年が見られませんが、聖徳太子像は、常如の次の十六世一如が同じく正圓に下したものでした。「上宮太子真影 河州丹北郡三宅村玉應寺」とあり、七高祖像も一如が正圓に下しており、「三朝高祖真影」とあり、聖徳太子像と同時に下付されたと思われる。

市域の東本願寺派の各寺は、寛文年間(一六六一〜七二)前後に、本山の十四世琢如から次の常如、一如の時代にかけて本尊の阿弥陀如来像をはじめ、親鸞像、太子七高祖像が下付されています。玉應寺も惣道場から、今見るような檀家制度の寺院化が進んだのでしよう。

江戸時代末期の弘化三年(一八四二)以後に三宅村のことを記した「飛嘉恵」に、江戸時代半ば以降の玉應寺について、次のようにあります。すなわち、宝永三年(一七〇六)、三宅村では大火があり(智光坊焼き)、村の大半が焼けたのですが、この時、玉應寺も焼失し、二年後の宝永五年(一七〇八)に本堂などが再建されたものでした。再建後の本堂は、梁行二間、桁行四間半の藁葺で、桁行の一方に瓦の庇が取りつけられていました。他には、藁葺の庫裏が並んでいました。

本堂の軒先には換鐘が架けられています。「南無阿弥陀仏」「河州丹北郡玉應寺」とあり、天明六年(一七八六)四月に寄進されたものです。玉應寺には

以前から梵鐘(鐘楼)が無かったらしく、それに代わるものとして、太鼓楼が建てられており、最近、修理された大太鼓が納められています。

また、山門を入った所に手水が置かれています。ここにも「玉應寺 天明四年庚申四月十七日」と刻され、天明四年(一七八四)の造立です。

明治時代になって、玉應寺十三代三省是空のあとを継いで、十四代住職となったのが砂本先照でした。明治三十二年(一八九九)三月三日のことで、先照は大正時代を通じて寺を維持しました。

先照は、もともと芝村(天美西)の真宗大谷派の安楽寺の二十一代住職であると共に、天美小学校や三宅小学校の教員として学校教育にたずさわっていました(「歴史ウォーク」203)。

先照は、安楽寺住職を経て、玉應寺に移りましたが、安楽寺時代にも寺誌をまとめ、檀家の過去帳を整備したように、玉應寺でも宝永六年(一七〇九)を初見とする過去帳を檀家ごとに体系化しました。大正十三年(一九二四)八月七日には、東本願寺二十二世現如の真影を二十三世彰如より下付を受け(本尊左側に掛かる)、同年十二月二十八日にも現存の本尊の須弥壇を新調したのでした。本堂前に、天保十一年(一八三九)十月に建立された歴代住職の「玉應寺墓」と並んで、「砂本墓」と刻した先照の墓が建っています。